

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

## 指示対象のズレと特殊な語形変化（3） 「キツツキ」及びその関連語彙を対象に

著者	太田 斎
雑誌名	神戸外大論叢
巻	65
号	2
ページ	107-130
発行年	2015-03-01
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1085/00001715/">http://id.nii.ac.jp/1085/00001715/</a>

## 指示対象のズレと特殊な語形変化（3）

——「キツツキ」及びその関連語彙を対象に——

太田 斎

## §7.1. ‘啄木鸟’ ←→ “臭椿”、“臭椿荚果” (§6.2.の補遺その1)

“戴胜ヤツガシラ”、“斑鳩キジバト”の“臭咕咕”、“椿象カメムシ”の“椿姑姑”といった語形は、“臭椿”、“臭椿荚果”を意味する“椿谷谷：ニワウルシ、ヌルデの木、若しくはそのさやに入った果実”（第二、三音節がkuの重ね型になっているものは様々な漢字表記がなされている）との間で起こった類音牽引によって、転用もしくは混同らしき状況が生じていると解釈する余地がある。以下、これについて検討する。管見の及ぶ限りで、これに関係しそうな例は以下の通り。

## “臭椿荚果”

山东阳谷：椿呱嗒儿 tɕʰuɔ̃<sup>13</sup> kua<sup>13-21</sup> tlar<sup>0</sup> 椿树结的扁形果实。荚果和种子都呈扁形 研究 128

Cf.花骨头儿 xua<sup>13</sup> ku<sup>13-21</sup> tʰlour<sup>0</sup> 蓓蕾 研究 127

树疙瘩 fu<sup>312-21</sup> kə<sup>13-21</sup> ta<sup>0</sup> 从树干的第一发根处向下的部分 研究 128

糟疙瘩子 tsə<sup>13</sup> kə<sup>0</sup> ta<sup>13-21</sup> tsɿ<sup>0</sup> 痤疮 研究 169

疙瘩 kə<sup>13-21</sup> ta<sup>0</sup> 用面做成的小球状食品，煮熟食用 研究 175

山东平邑：椿谷谷 pʰən<sup>213-21</sup> ku<sup>0</sup> ku<sup>0</sup> 臭椿荚果 山东方言词典 79

河北清河：椿鼓鼓 椿树籽 707

河南获嘉：椿古古 tɕʰun<sup>33-31</sup> ku<sup>13</sup> ku<sup>33</sup> 椿树的种子 研究 226

陕西岐山：椿姑姑 ɛtɕʰəŋ ɿku ku<sup>ɿ</sup> 椿树的果实 691

山东高密：谷谷儿 ku<sup>44-21</sup> kur<sup>14</sup> 臭椿荚果 山东方言词典 79

## “戴胜”

山东博兴：臭咕咕 tɕʰo<sup>21</sup> ku<sup>53-55</sup> ku<sup>0</sup> 戴胜（陈户镇）黄河三角洲 168

吉林通化二道江区：臭咕咕（/ gúgu /）戴胜 620

黑龙江哈尔滨：臭咕咕 tɕʰou<sup>53</sup> ku<sup>24</sup> ku<sup>0</sup> 戴胜 词典 250

河北滦南：臭咕咕 tɕʰəu<sup>55-53</sup> ku<sup>33</sup> ku<sup>0</sup> 戴胜 819

河北深泽：臭咕咕 tɕʰəu<sup>31</sup> ku<sup>33</sup> ku<sup>0</sup> 571

宁夏银川：臭咕咕 tɕʰəu<sup>13</sup> ku<sup>44</sup> ku<sup>0</sup> 戴胜，一种夏候鸟。嘴细长而弧曲，

舌短呈三角形。头顶具有扇形棕色冠羽，  
体羽斑驳，翅宽圆，尾方形，翅和尾均具  
黄斑。栖息活动于村庄、田野，性不畏人，  
食昆虫 词典 206

山西和顺：臭胡胡 tʂʰəu<sup>41</sup> xu<sup>22</sup> xu<sup>22-21</sup> 鸟名，亦名戴胜 61

### “斑鸠”

新疆乌鲁木齐：臭包包 tʂʰy<sup>44</sup> pɔ<sup>21</sup> pɔ<sup>24</sup> =斑鸠 回民 98

新疆乌鲁木齐：包包鸪 pɔ<sup>21</sup> pɔ<sup>24</sup> tʂʰɿ<sup>24</sup> =斑鸠 回民 98

### “布谷鸟”

山东曲阜：春谷谷 tʂʰu<sup>213-13</sup> ku<sup>213-211</sup> ku<sup>0</sup> 布谷鸟 63

山东兖州：春谷谷 tʂʰu<sup>213-13</sup> ku<sup>312-31</sup> ku<sup>0</sup> 布谷鸟 848

山东历城：春谷谷 布谷鸟 449

山东济阳：春谷儿谷儿 布谷鸟 587

内蒙锡林浩特：臭卜姑 布谷鸟 (太仆寺旗) 1841

河北张北：臭八姑 大杜鹃 659

河北尚义：臭鹁鸪 tʂʰəu<sup>24</sup> paŋ<sup>21</sup> ku<sup>31</sup> 杜鹃 1012

### “啄木鸟”

山西新绛：臭关关 tʰəu<sup>31-51</sup> kuā<sup>53-11</sup> kuā<sup>53-31</sup> 啄木鸟 35<sup>1</sup>

Cf. “臭~气” tʰəu<sup>31</sup> 19

陕西洋县：牵拐拐 tʰian kuai kuai 啄木鸟 777<sup>2</sup>

山西平鲁：铎咕咕 pəy<sup>53</sup> ku<sup>33</sup> ku<sup>33</sup> 啄木鸟 81

甘肃武威：咕咕头 啄木鸟 763 = “斑鸠”

「ニワウルシの木」は悪臭を放つので、その葉が食用に供される“香椿(树)”と対比されて、“臭椿(树)”と呼ばれ、そもそもが「臭」と結びついている。“椿树”、“樗树”は方言により、“香椿(树)”と“臭椿(树)”をひっくるめた総称として用いられる場合と、“臭椿(树)”のみを指す場合がある。管見の及ぶ限りでは、“椿树”、“樗树”で“香椿(树)”のみを指すことは無いようである。“咕咕”、“姑姑”、“谷谷”“鼓鼓”、“古古”は今のところ十分な検証ができず、初歩的な推測に留まるが、上掲の山西左権方言の例から見て、恐らく「かたまり」を意味する“骨朵 kuəŋ<sup>11</sup> tuɣ<sup>42</sup>”（“花骨朵”は「花の蕾」の意）が重ね型の擬音語、親族名称と結び付けられて成立したものだろう。“骨朵”は方言により“圪朵”、“骨嘟”など様々な表記

<sup>1</sup> tʰəu<sup>31-51</sup> 原文は tʰ を欠く。

<sup>2</sup> tʰian 原文は tbian と誤る。

で現れ、音声形式は概ね[kə(?) tuə~ku tu]となっている。山東陽谷方言の場合は前の音節が [kuə] ではなく、[kua] と外転系主母音である点がうまく説明できないが、同じく「かたまり」の意の“疙瘩 kə<sup>13-21</sup> ta<sup>0</sup>”が連音変化で“呱嗒儿 kua<sup>13-21</sup> tlar<sup>0</sup>”となったものと考えたい。想定する変化のプロセスは以下の如くである：tɕ<sup>h</sup>uən kə ta(r)→tɕ<sup>h</sup>uən ka ta(r)→tɕ<sup>h</sup>uən kua ta(r)、若しくは tɕ<sup>h</sup>uən kə ta(r)→tɕ<sup>h</sup>uən kuə ta(r)→tɕ<sup>h</sup>uən kua ta(r)。以下、[ku ku]という音声形式を表す“咕咕”、“姑姑”などの表記は特に区別する必要のない場合は、由来の如何を問うことなく、一律に“姑姑”という漢字表記を用いて表記する。この漢字を選んだことに特に理由は無い。

“臭椿(樹)”はまた“樗樹”とも呼ばれるので、類音関係から、“樗姑姑”が“臭姑姑”となったとの想定も可能なようであるが、“樗姑姑”も“臭姑姑”も管見の及ぶ限りでは報告例が無い。“臭樹姑姑(儿)”はあるから、これから“臭姑姑”が生じる可能性は否定できないが、現時点で集めたデータに基づく限り、「キツツキ」、「九官鳥」などの鳥名の“臭姑姑”は「ニワウルシの木、果実」との類音牽引で生じたとは考え難い。大雑把に概括すると、「ニワウルシの木、果実」は“椿姑姑”、「ヤツガシラ」は“臭姑姑”、「カッコウ」は“春姑姑”が優勢で、「ヤツガシラ」を“春姑姑”若しくは“椿姑姑”とする例は見当たらない。鳥名につく“姑姑”は恐らく鳴き声に由来する擬声語である。「カッコウ」に“臭”が付くのは管見の及ぶ限りで、上掲の3例のみ。いずれも“臭姑姑”ではなく、“臭”と「ハト」を意味する“鶉鴒”とが結び付いたかのような語形である。今はこれらが指示対象の混乱と音声形式の錯綜が生じたことによって、「キツツキ」にも“臭”を冠する語形が生じたと考えたい。“臭”で表記されるそもそもの語源は“鵪”由来の tɕ<sup>h</sup>ian 又は ts<sup>h</sup>an か、若しくは“啄”由来の tau が類音の“臊”と解釈され、それが同義語の“臭”に置き換えられたものか。「カッコウ」の“臭”の付く例はいずれも“臭姑姑”という語形にはなっていないから、「ニワウルシの木、果実」の直接の影響で生じたものではないだろう。§6.2で既に指摘したが「カメムシ」についても“椿姑姑”はあるが、“臭姑姑”という語形の報告例は皆無で、“臭”がつくのはほとんどが“臭大姐”という語形である。“姑姑”との関連で言えば、“臭”がついて不思議の無い「ニワウルシの木、果実」、「カメムシ」に“臭”が付かず、「カッコウ」や「キツツキ」には“椿姑姑”、“春姑姑”だけでなく、“臭”のつく語形が見られるという、その特性から見れば、一種の逆転現象とも思える状況はどう説明するか。今のところ説得力のある解釈が思いつかない。「ヤツガシラ」の“臭”が「ニワウルシの木、果実」、「カメムシ」の影響で加えられた可能

性が低いことから、この鳥自体が悪臭を放つという語釈（山西万荣の“臭鸛鸛”）は民間語源によるものではなく、科学的根拠があるのだろう<sup>3</sup>。

「ニワウルシの木、果実」と“戴胜”、「カッコウ」の間には類音牽引が生じているのではないかと思わせる語形が無い訳ではない。

### “臭椿荚果”

山东新泰：步步齿儿 pu<sup>41</sup> pu<sup>0</sup> tʃ<sup>h</sup>ɿr<sup>55</sup> 臭椿荚果 山东方言词典 79

山东新泰：步步齿儿 pu<sup>31</sup> pu<sup>31</sup> tʃ<sup>h</sup>ɿr<sup>55</sup> 臭椿荚 志 115

山东新泰：步步齿 pu<sup>ɰ 41</sup> pu<sup>ɰ 31</sup> ʈʃ<sup>h</sup>ɿ<sup>55</sup> 臭椿荚 研究 201

山东滨州：鸛鸛翅儿 臭椿的果荚 705

### “戴胜鸟”

山西大宁：布布痴 pu<sup>55</sup> pu<sup>55</sup> tʃ<sup>h</sup>ɿ<sup>21</sup> 戴胜鸟 486

甘肃兰州：卜卜吃 pu<sup>53</sup> pu<sup>53</sup> tʃ<sup>h</sup>ɿ<sup>1</sup> 戴胜鸟，象其叫声 市志 197

甘肃兰州：卜卜吃 pu<sup>53</sup> pu<sup>0</sup> tʃ<sup>h</sup>ɿ<sup>53</sup> 戴胜鸟，一种益鸟。羽毛大部为棕色、嘴细长而稍弯 || 象其声而得名 词典 43

甘肃榆中：步步咏(吃) pəu<sup>31</sup> pəu<sup>0</sup> tʃ<sup>h</sup>ɿ<sup>31</sup> 戴胜 741<sup>4</sup>

新疆焉耆：抱抱嗤 戴胜鸟 县志 838

新疆乌鲁木齐：包包吃 pɔ<sup>44</sup> pɔ<sup>44</sup> tʃ<sup>h</sup>ɿ<sup>0</sup> 一种鸟，羽毛大部为棕色，有羽冠，嘴细长而稍弯。吃昆虫，对农业有益 词典 185

甘肃民勤：勃勃赤 戴胜 809

陕西吴旗：抱抱赤 pau<sup>44</sup> pau<sup>44</sup> tʃ<sup>h</sup>ɿ<sup>41</sup> 一种头部有较大羽冠的候鸟 909

山西永和：□□鸛 pəŋ<sup>35</sup> pəŋ<sup>35-33</sup> tʃ<sup>h</sup>ɿ<sup>33</sup> 一种鸟 研究 135

### “布谷鸟”

新疆哈密：包包鸛 pɔ<sup>55</sup> pɔ<sup>51</sup> tʃ<sup>h</sup>ɿ<sup>21</sup> 布谷鸟 137

新疆吉木萨尔：包包鸛 pɔ<sup>44</sup> pɔ<sup>44</sup> tʃ<sup>h</sup>ɿ<sup>0</sup> 布谷鸟 96

内蒙东胜：包包嗤 布谷鸟 937

新疆乌鲁木齐：包包鸛 pɔ<sup>21</sup> pɔ<sup>24</sup> tʃ<sup>h</sup>ɿ<sup>24</sup> =斑鸠 回民 98

山西娄烦：伯伯翅 pia<sup>ɿ3</sup> pia<sup>ɿ3</sup> tʃ<sup>h</sup>ɿ<sup>54</sup> 一种鸟 662

山西娄烦：伯伯翅 piə<sup>ɿ3</sup> piə<sup>ɿ3</sup> tʃ<sup>h</sup>ɿ<sup>54</sup> 一种鸟 研究 76

### “啄木鸟”

<sup>3</sup> 尾の分泌腺から黒褐色の悪臭を放つ油状の液体を分泌するとある。以下のサイト参照。

“戴胜鸟” <http://baike.baidu.com/view/882948.htm>（アクセス日時 2014.9.23.19:33）

<sup>4</sup> tʃ<sup>h</sup>ɿ<sup>31</sup> 原文は tʃ<sup>hi</sup>31 と誤る。

陝西安塞：蹦蹦吃 pəŋ<sup>52</sup> pəŋ<sup>0</sup> tɕʰɿ<sup>312</sup> 啄木鸟 686<sup>5</sup>

陝西横山：崩崩吃 pəŋ<sup>33</sup> pəŋ<sup>33</sup> tɕʰɿ<sup>0</sup> 啄木鸟 648

河北尚义：梆梆虫 pɔu<sup>31</sup> pɔu<sup>24</sup> tsʰuəŋ<sup>31</sup> 啄木鸟 1012

河南洛阳：梆梆虫儿 paŋ<sup>33</sup> paŋ<sup>0</sup> tɕʰuɿ<sup>31</sup> 啄木鸟 研究 14、143

河北宣化赵川：梆梆虫子 pəŋ<sup>42</sup> pəŋ<sup>13</sup> tsʰuŋ<sup>42</sup> zɛe<sup>0</sup> 啄木鸟 研究 64

河南洛阳：梆梆虫 paŋ<sup>33</sup> paŋ<sup>33</sup> tɕʰuɿ<sup>31</sup> 啄木鸟 研究 143

河南洛阳：梆梆虫 paŋ<sup>34</sup> paŋ<sup>34-44</sup> tɕʰuəu<sup>42</sup> 啄木鸟 市志 487

山西文水：梆梆雀 pu<sup>22-11</sup> pu<sup>22-35</sup> tɕʰiʊ<sup>423</sup> e<sup>22</sup> 啄木鸟 II/71-72

河北冀县：步步墩 pu<sup>53</sup> pu<sup>31</sup> tuən<sup>213</sup> 啄木鸟 719 ← “梆梆啄木”？

河北冀州：步步墩 pu<sup>31</sup> pu<sup>31</sup> tuən<sup>213</sup> 啄木鸟 开篇 22/190

河南杞县：叭叭端子 pʰa<sup>24</sup> pʰa<sup>0</sup> tuan<sup>24</sup> tsɿ<sup>55</sup> 啄木鸟 854<sup>6</sup>

この場合も「ニワウルシ」の上掲の語形が現れるのが山東であるのに対し、“戴胜”の類似語形が現れるのは西北であって、一つの地域で両者の間に類音牽引が起こっているという訳ではない。類音関係にあるとはいえ、漢字表記にも一致が見られない。地理的な棲み分けの可能性も無い訳では無いが、特に擬声語の重ね型が絡む場合は偶然の一致が起り易いことも否定できない。上掲例を見る限りでは「カッコウ」を表す“梆梆虫”が弱化で pau pau tsʰ/tɕʰuəŋ～pau pau tsʰɿ/tɕʰɿ のようになって、“戴胜”を表すのに転用され。それが音声形式が更に崩れて山東の「ニワウルシ」に似た語形になったと考えておく。

陝西安塞、横山の「キツツキ」は“梆梆虫”が「ヤツガシラ」との混交で成立したものではないか。“梆梆雀”は報告例が希少で、“梆梆虫”の分布域にあるから、“虫”が弱化した結果、類音の“雀”と認識されるようになったものだろう。

## § 7.2. “斑鳩”の関与

「ニワウルシ」そのものが直接「キツツキ」語形に変容を齎したとは考え難いにしても、「ニワウルシ」と“斑鳩キジバト”の間には類音牽引が見られる。今のところ、一例のみだが、陝西扶風方言の“姑姑等”は「ニワウルシ」と「キジバト」の両方を意味する。これは前者の語形が後者に一致し

<sup>5</sup> tɕʰɿ<sup>312</sup> 原文は tɕɿ<sup>312</sup> と誤る。

<sup>6</sup> tsɿ<sup>55</sup> 原文は tsi<sup>55</sup> と誤る。

たということだろう。このようになる以前の同方言の「ニワウルシ」語形がどのようなものであったか、確たる手掛かりは無い。憶測にすぎないが、“椿姑姑”若しくは“樗姑姑”が「キジバト」の“姑姑等”の影響を受けて“姑姑椿”若しくは“姑姑樗”のような語構成に再解釈されて、それが“姑姑翅”となったものか。但し“椿姑姑”及び“姑姑椿”、“姑姑樗”の実例は見ない。前節で紹介した「ニワウルシ」の“歩歩齒”と言った語形は、“姑姑翅”と「ヤツガシラ」の“包包吃”、「カッコウ」の“包包鸚”といった語形に平仄を合わせてできたものだろう。或いは「ヤツガシラ」の“包包吃”、「カッコウ」の“包包鸚”の影響で、“椿姑姑”もしくはただの“姑姑”であった「ニワウルシ」が類推で“姑姑翅”、更には“歩歩齒”のようになったものか。「キジバト」には“姑姑等”、“姑姑虫”はあるが、“姑姑翅”のような実例は見当たらない。“姑姑虫”は弱化で“姑姑翅”となる音声環境にあるが、実例が無いので、「キジバト」との関係だけで「ニワウルシ」が“姑姑翅”、“歩歩齒”に変化したとは考えられない。やはり「ヤツガシラ」の“包包吃”、「カッコウ」の“包包鸚”も関与したと考えるべきであろう。

### “臭椿荚果”

- 山东高密：谷谷儿  $ku^{44-21} kur^{14}$  臭椿荚果 山东方言词典 79  
 陕西扶风：姑姑等  $ku^{31-42} ku^{31} t\eta^{42}$  臭椿结的簇生的条形果实 126  
     Cf. 姑姑等  $ku^{31-42} ku^{31} t\eta^{42}$  斑鸠 130  
 山东青州：姑姑翅  $ku^{214-21} ku^0 t\eta^h\chi^0$  臭椿荚果 山东方言词典 79  
     ← “姑姑樗”？  
 山东东营：鼓鼓翅  $ku^{213-21} ku^0 t\eta^h\chi^{213}$  樗树的果荚(广南话) 142  
     ← “姑姑樗”？  
 山东广饶：鼓鼓翅  $ku^{213-21} ku^0 t\eta^h\chi^{213}$  樗树的果荚 870 ← “姑姑樗”？

### “斑鳩キジバト”

- 山东新泰：咕咕  $ku^{42} ku^{42}$  斑鳩 志 110  
 山东宁阳：咕咕  $ku^{312-42} ku^0$  志 208  
     斑鳩  $p\tilde{a}^{214-31} t\epsilon i\partial u^0$  志 208  
 河南舞钢：姑姑儿 斑鳩 731  
 陕西蒲城：咕咕等  $ku^{24} ku^{02} t\eta^{53}$  708  
     斑斑  $p\tilde{a}^{31} p\tilde{a}^{02}$  斑鳩 708  
 陕西蓝田：姑姑等 /  $\epsilon gu \epsilon gu \epsilon deng$  / 斑鳩鸟 648  
 陕西兴平：咕咕等  $ku^{31-35} ku^{31} t\eta^{52}$  斑鳩 811

- 宁夏银川：咕咕登 ku<sup>44</sup> ku<sup>0</sup> təŋ<sup>53</sup> 斑鸠 方言志 95  
 甘肃张家川：姑姑等 ku<sup>24</sup> ku<sup>24-21</sup> təŋ<sup>42</sup> 斑鸠，因其鸣声似“姑姑，等”故名 1413  
 陕西西安：咕咕等 ɛku ·ku ɛtəŋ 斑鸠 普通 3711  
 陕西宝鸡：咕咕(等) ɛku ·ku (ɛtəŋ) 斑鸠 普通 3711  
 新疆哈密：咕咕等 ɛku ɛku ɛtəŋ 斑鸠 普通 3711  
 新疆乌鲁木齐：咕咕等 ɛku ɛku ɛtəŋ 斑鸠 普通 3711  
 山西文水：咕咕种 ɛku ɛku tsuəŋ<sup>2</sup> 斑鸠 县志 704  
 山西太原：姑姑种 ku<sup>11</sup> ku<sup>11</sup> tsuŋ<sup>45</sup> 一种灰色鸟，比鸽子小，芒种前后飞翔于田间 FY297  
 山东鄆城：咕咕虫 /gūgūchong/ 斑鸠 620  
 河南濮阳：咕咕虫 ku<sup>33-34</sup> ku<sup>34</sup> tɕ<sup>h</sup>uŋ<sup>452-42</sup> 斑鸠 500

### § 7.3. ‘啄木鸟’ ←→ “鶉鴒”？ (§6.2.の補遺その2)

§ 6.2. で取り上げた語形に、語頭の“鶉”、若しくは“鶉樹”に続く二音節の声母が p- k- となっているものがある。この p- k- の二音節の部分は一見、“鶉鴒：ハト”のような語形になっているが、韻母の形式がこの地域の「ハト」語形のそれとは一致しないから、「キュウカンチョウ」語形が関与して、“鶉鶉鴒”のような混合語形が生じたのではないかと指摘した。漢字表記から見て、「ハト」を意味する他地域で優勢な語形“鶉鴒”の関与も考慮の余地がありそうだが、概ね [pu kə] のような音声形式のこの「ハト」語形は山東では優勢であるものの、河北、河南では“鸽子”の方が優勢で、“鶉鴒”の報告例は多くない。一方、陝西方言の“鶉鴒”由来の「ハト」語形を見ると、殆どの方言で概ね第一音節が [p<sup>h</sup>u~p<sup>h</sup>ə~mə]、第二音節が [kuo~kʏ] のような語形となっており、既に指摘したように、韻母の形式が一致しないばかりか、第一音節の声母も異なっている。つまりここで問題としている [pu kə] のような音声形式の“鶉鴒”は山西、陝西に近い地域では優勢語形とは言えないので、ひとまず“鶉鴒”は記述者の語源意識の反映で、現地の人々の意識とは乖離しているものと推測する。つまり“鶉鴒 pu kə”の関与は一先ず否定する。

### “啄木鸟”

- 山西新绛：臭关关 t<sup>h</sup>əu<sup>31-51</sup> kuā<sup>53-11</sup> kuā<sup>53-31</sup> 啄木鸟 35<sup>7</sup>

<sup>7</sup> t<sup>h</sup>əu<sup>31-51</sup> 原文 <sup>h</sup> を欠く。



Cf. “臭<sub>~</sub>气” t<sup>h</sup>əu<sup>31</sup> 19

河北定兴：臭磕虫 啄木鸟 河北词汇 118

河北容城：臭铎打 啄木鸟 501

陕西延长：丑卜古 tɕ<sup>h</sup>əu<sup>52</sup> pə<sup>35</sup> ku<sup>0</sup> 啄木鸟 598、陕北 140

← “臭包包” + “鸛鸛”？

陕西洋县：牵拐拐 t<sup>h</sup>ian kuai kuai 啄木鸟 777<sup>8</sup>山西平鲁：铎咕咕 pəy<sup>53</sup> ku<sup>33</sup> ku<sup>33</sup> 啄木鸟 81

甘肃武威：咕咕头 啄木鸟 763 = “斑鸠”

-----  
陕西志丹：树圪巴 啄木鸟 770陕西吴旗：树圪巴儿 ʂu<sup>44</sup> kəʔ pər<sup>21</sup> 啄木鸟 909陕西吴旗：树圪叭儿 ʂu<sup>44</sup> kəʔ<sup>3-5</sup> pər<sup>0</sup> 啄木鸟 陕北 140-----  
山西安邑：嗛剥剥 读为千巴巴，啄木鸟也，食枯木之虫，其声剥剥 47山西孝义：鸛剥咕 tɕ<sup>h</sup>iaŋ<sup>11</sup> pa<sup>ʔ2-53</sup> ku<sup>11</sup> 啄木鸟 86河北涉县：鸛巴果 tɕ<sup>h</sup>iä<sup>31-33</sup> pa<sup>0</sup> kuo<sup>53</sup> 啄木鸟 7、县志 869<sup>9</sup>Cf. 招巴果 tɕ<sup>h</sup>ia<sup>31-33</sup> pa<sup>0</sup> kuo<sup>53</sup> 啄木鸟 省志 569山西长治：鸛剥骨 ɛtɕ<sup>h</sup>iaŋ pa<sup>ʔ</sup> kuə<sup>ʔ</sup> 啄木鸟 普通 3713山西介休：□树脖咕 tɕ<sup>h</sup>iē<sup>13-11</sup> sɿ<sup>45</sup> pʌ<sup>ʔ423-53</sup> ku<sup>13-0</sup> 啄木鸟 27山西平遥：嵌树剥咕 tɕ<sup>h</sup>iaŋ<sup>13-31</sup> sɿ<sup>35</sup> pʌ<sup>ʔ423-54</sup> ku<sup>13-31</sup> 啄木鸟 民俗 71山西沁源：鸛树八姑子 啄木鸟 472<sup>10</sup>山西灵石：鸛树鸛鸛 tɕ<sup>h</sup>iä<sup>214</sup> su<sup>53</sup> pa<sup>ʔ33</sup> ku<sup>214</sup> ku<sup>214</sup> 啄木鸟 605山西沁县：秋树□钩钩 tɕ<sup>h</sup>iəu<sup>213-21</sup> su<sup>55</sup> pə<sup>ʔ4</sup> kəu<sup>213-42</sup> kəu<sup>213</sup> 啄木鸟 27**“布谷鸟”**

内蒙锡林浩特：臭卜姑 布谷鸟 (太仆寺旗) 1841

河北尚义：臭鸛鸛 ts<sup>h</sup>əu<sup>24</sup> pa<sup>ʔ21</sup> ku<sup>31</sup> 杜鹃 1012

河北张北：臭八姑 大杜鹃 659

ここで問題となるのは、「キツツキ」には“鸛巴巴”、“鸛包包”、“臭关关”（孤例。§6.2 で言及）といった語形はあるが“臭包包”、“臭咕咕”

<sup>8</sup> t<sup>h</sup>ian 原文 tbian と誤る。

<sup>9</sup> 県志の漢字表記は“鸛”が欠けている。他の文献には正しく“鸛巴果”となっているのを確認してあるのだが（音声表記は全く同じ）、情けないことにその文献が何であったかを記録しておかなかったため、今は只その p.7 に載っているということだけしか分からない。とりあえずはその文献に従い、漢字表記を“鸛巴果”としておく。

<sup>10</sup> “鸛”、原文は“鸛”に誤る。

という語形は皆無であるということである。恐らくは、先ず本来「ヤツガシラ」を指す“臭姑姑”と「キュウカンチョウ」の“八哥”の間に混交が生じて、“臭八姑”のような両者の中間形態の語形が生まれ、それが「カッコウ」を指す“春姑姑”との間に指示対象の混乱を生じ、“臭八姑”が「カッコウ」を指すようになり、これが「キツツキ」にも転用されることになったということではないか。上掲の内蒙古シリント、河北尚義、張北方言の「カッコウ」語形はこれで説明がつく。“臭八姑”は容易に“臭鶉鴒”と漢字表記し得るような音声形式に変容するであろう。既に指摘したように「ハト」語形の“鶉鴒”の関与は考え難い。このように考えると「カッコウ」に“臭鶉鴒”のような語形はあるが（管見の及ぶ限りで上掲の3例のみ）、“臭姑姑”という語形の報告例が全く無いということも説明がつく。

この他に「ヤツガシラ」の“臭姑姑”と“鶉鶉鶉”由来の、特に漢字表記すれば“鶉巴巴”、“鶉包包”のような「キツツキ」語形とが合体してできた可能性もある。つまり漢字表記すれば、“鶉巴巴キツツキ”＋“臭姑姑キツツキ←ヤツガシラ”→“臭巴巴キツツキ”のような変化である。山西孝義、河北涉県などの語形は、“鶉巴巴キツツキ”＋“臭姑姑キツツキ←ヤツガシラ”→“鶉巴巴キツツキ”のような同様のプロセスで生じたもう一つの間接形態語形と解釈できる。

中間形態ということでは、“臭姑姑”、“鶉姑姑”のような語形も誕生してよさそうだが、これに該当する実例は見当たらない。上掲の陝西志丹、呉旗の“树圪巴”は或いは“臭姑姑”のバリエーションとも見做せそうな例だが、“鶉树巴巴キツツキ”＋“臭姑姑キツツキ←ヤツガシラ”→“鶉树姑姑キツツキ”→“鶉树姑姑キツツキ”ということかも知れない。そうであれば、“树”と“臭”の類音関係も何らかの触媒作用を果たしたと言えよう。但し“春姑姑カッコウ”、“水姑姑キジバト”など *ku ku* の前に別の要素を冠した鳥名も候補足り得、今のところそれらを排除することはできない。“臭姑姑”、“鶉巴巴”のような語形が皆無と言って良いような状況にあるのは、このような中間形態の語形の成立にはやはり §6.2 で紹介した [*pa kuo*] のような形態の「キュウカンチョウ」語形も関与したからだろう。地域的にも、音声的にも離れてはいるが、「キツツキ」と「キュウカンチョウ」の類音牽引の例として以下のようなものがある。

安徽宿松：啄八狗 *tso*<sup>22</sup> *pa*<sup>55</sup> *kiəu*<sup>0</sup> 啄木鸟 129←“臭包包”？＋“八狗”  
cf. 八狗 *pa*<sup>55</sup> *kiəu*<sup>0</sup> 八哥儿 129

混交が二つの語ではなくそれ以上の数の語の間で錯綜して起こることについては既に太田 2002 で指摘している。

#### §7.4. “鑄啄木” ←→ “畚鍤” “插門”

“鑄啄木”の第二音節声母が有気音になっている例が見られる。該当例は以下の通り。“鑄啄”から“畚鍤もっこ”への連想が働いたということではないか？遺憾ながら、“畚鍤もっこ”は通常の語彙調査表には現れない語彙なので、これの方言語彙はデータが集まらず、確たることが言い難い。末尾の東南方言の二例は、成立要因が異なるので、除外する。広東雷州方言の例は恐らく、双声化により有気音に変化したものだろう。湖南沅陵方言については全濁仄声の有気音になる例が見られるから、“凿木公”に由来する、或いは“凿”と“啄”の混交によって“啄 ts<sup>h</sup>ua<sup>13</sup>”となったものだろう。「(工具の)ノミ」に現れる“凿”が do<sup>13</sup>となっているのが、この解釈の反証となりそうだが、これについては異なる方言層に属するものと考えておく。

当て字で“畚鍤木”というような表記は見られないのだが(“鑄插木儿”はある)、“鑄啄木”という語形でしか“啄”の有気音化が見られないので、“畚鍤”への連想により有気音に変化した可能性が高い。恐らく“木”が軽声で発音され、韻母が [ə] になっていること、或は児化することで、語源の同定が不確かとなり、“鑄啄木(儿) pən tɕ<sup>h</sup>a mur → pən tɕ<sup>h</sup>a mər”の第二、第三音節“啄木儿 tɕ<sup>h</sup>a mər”から“插門儿 tɕ<sup>h</sup>a mər: 門かんめきをかける”への連想が働いた(“插門儿”の方言データも未収集)のだろう。“啄木(儿)”から“插門(儿)”への変化は“畚鍤もっこ”への連想が働いて、“畚鍤木(儿)”のような形式になってから生じたものか、それとも“畚鍤木(儿)”のような形式を経由することなく、“鑄啄木(儿)”から直接変ったものか、現在のデータからは判断できないが、恐らく前者であろう。

河北灵寿：鑄咤木 pən<sup>22</sup> tɕ<sup>h</sup>a<sup>33</sup> mu<sup>31</sup> 啄木鸟 706

河北石家庄：奔咤木 pən ts<sup>h</sup>Λ mu 啄木鸟 (官话) 1029

河北辛集：奔咤木 pei<sup>33</sup> ts<sup>h</sup>ɔə<sup>45</sup> mu<sup>11</sup> 啄木鸟 石家庄 1029

河北平山：奔咤木 peŋ<sup>21</sup> ts<sup>h</sup>ɑ<sup>21</sup> mu<sup>42</sup> 啄木鸟 石家庄 1029

河北无极：鑄乍木 啄木鸟 670

河北柏乡：鑄扎木儿 啄木鸟 199

河北阜平：鑄喳木儿 啄木鸟 794

河北新乐：鑄渣木儿 啄木鸟 685

河北栾城：鑄查木儿 啄木鸟 907

河北巨鹿：鑄凿木 pən<sup>33</sup> tsau<sup>31</sup> mu<sup>11</sup> 啄木鸟

河北平山：鑄杈木儿 pəŋ<sup>21</sup> tɕ<sup>h</sup>a<sup>21-55</sup> mər<sup>21</sup> 啄木鸟 839

河北行唐：鑄杈木儿 pən<sup>213</sup> tɕ<sup>h</sup>a<sup>34</sup> mər<sup>34</sup> 啄木鸟 685

河北平山：鑄杈门儿 ɛpəŋ ɛtɕ<sup>h</sup>a ɛmər 啄木鸟 普通 3713

河北赞皇：奔杈门儿 pəŋ<sup>55</sup> tɕ<sup>h</sup>a<sup>55</sup> mər<sup>55</sup> 啄木鸟 606

河北高邑：鑄插门儿 啄木鸟 655

河北获鹿：鑄插(扎/ zha / )木儿 啄木鸟 县志 801

河北获鹿：鑄插木儿 pɛ<sup>55</sup> tɕ<sup>h</sup>Λ<sup>0</sup> mur<sup>31-55</sup> 啄木鸟 116; “插” tɕ<sup>h</sup>Λ<sup>13</sup>(入)

62

广东雷州：凿树公 ts<sup>h</sup>ak<sup>1</sup> ts<sup>h</sup>iu<sup>24-33</sup> kəŋ<sup>24</sup> 啄木鸟 词典 308;

Cf. “𪔐(=𪔐)” tak<sup>1</sup> 词典 306

tak ts<sup>h</sup>iu kəŋ → ts<sup>h</sup>ak ts<sup>h</sup>iu kəŋ

湖南沅陵：啄木公 ts<sup>h</sup>ua<sup>13</sup> moŋ<sup>53</sup> kəu<sup>55</sup> 啄木鸟 研究 129 ← “凿木公” ?

Cf. 凿子 do<sup>13</sup> tsa<sup>0</sup> 研究 134

河北獲鹿方言の県志の例は注目に値する。この表記から、実際には[pən tɕa mur] のような音声形式の段階で、既に“畚鍤木(儿)”への連想が働いていることがその表記から窺われる。この表記からは、この語形において“插”が“扎/zha/”のように発音されていると解釈されていることが分かる。それがもう一つの獲鹿方言では“插”に対して tɕ<sup>h</sup>Λ と、轻声となっているが、単字音形式に一致している。平山方言など“杈”で表記されている例も同様に考えて良いだろう。これは§0.で紹介した山東博山方言の“童养媳”が特殊な変化をし、“养”が[ian] という音声形式になった段階で既に“圓”(単字音形式は[yan<sup>55</sup>])と結び付けられ、それが同様の変化を来たした周辺の方言では yan のように変わって“圓”の単字音形式と完全に一致してしまっているという状況と同じである。

## §8. キツツキの擬人化 (§6.3 補遺)

キツツキ語形の擬人化には“官”、“公”、“匠”といった要素が現れる。“匠”の例は希少で、管見の及ぶ限りでは4例しかない。以下の例を参照されたい。

- 湖南长沙：啄木官 tʂa<sup>24</sup> mo<sup>24</sup> kō<sup>33</sup> 啄木鸟 研究 126  
 湖南浏阳：啄木鸛 tso<sup>44</sup> mo<sup>44</sup> kōỹ<sup>33</sup> 啄木鸟 研究 121  
 湖南吉首：啄木官 tsua<sup>11</sup> muŋ<sup>0</sup> kuan<sup>0</sup> 啄木鸟 研究 120  
 湖南涟源：啄木官 tsua<sup>33</sup> mə<sup>33</sup> kuɛ<sup>44</sup> 啄木鸟 研究 131  
 安徽宁国：啄米官 tʂo<sup>55</sup> mi<sup>24</sup> kuã<sup>31</sup> 啄木鸟 省志 563  
 安徽广德：啄米官 tso<sup>55</sup> mi<sup>35</sup> kuã<sup>42</sup> 啄木鸟 省志 571  
 湖南娄底：啄木公 tsua<sup>35</sup> mo<sup>35</sup> kɤŋ<sup>0</sup> 啄木鸟 研究 144  
 湖南娄底：□木公 tsua<sup>35</sup> mo<sup>35-55</sup> kɤŋ<sup>0</sup> 啄木鸟 词典 61  
     cf. □ tsua<sup>35</sup> ①啄(食)②叩击 词典 61  
 湖南沅陵：啄木公 ts<sup>h</sup>ua<sup>13</sup> moŋ<sup>53</sup> kəu<sup>55</sup> 啄木鸟 研究 129  
 安徽太平：排工匠 tsã<sup>32</sup> koŋ<sup>32</sup> ʒiɔ̃<sup>24</sup> 啄木鸟 省志 355  
     ← “啄木公” (← “啄木官”) + “工匠”  
 山东荣成：打木匠 ta<sup>213</sup> m<sup>0</sup> tsiãr<sup>22</sup> 啄木鸟 北大 97  
 山东文登：打木匠儿 ta<sup>213</sup> mu<sup>0</sup> tsiaŋr<sup>33</sup> 啄木鸟 909  
 山东莱州：瞎木匠 ɕia<sup>55</sup> mu<sup>42</sup> tsiaŋ<sup>0</sup> 啄木鸟 121

山東方言の3例は周辺に分布する語形からみて、“啄木虫”が特殊な変化をしたものか、或いは“啄木鸟”がタブー語“鸟”の発音(tiau)を忌避して、niauのようにならず、tsiaŋとなったものか。現在のところ説得力のある解釈は提示できない。安徽省太平方言の例は恐らく、“啄木官”であったものが“啄木公”となり、“公”と“工”の同音関係から、“工匠”が結びつけられたものであろう。“工匠”とすることで、“公”ではなく“工”であると語源を明確にする意図が働いたともいえる。このような構成要素の同定を助けるために説明の要素を付与するようなやり方については以下の例を参考に挙げておこう。

“酒窩えくぼ”

- 河南郑州：酒窩儿 tsiou<sup>53</sup> uor<sup>24</sup> 99  
 河南濮阳：酒窩儿 tsiou<sup>55</sup> yuor<sup>33</sup> 报告 93  
 河南西华：喝酒窩儿 / he<sup>24</sup> jiu<sup>55</sup> wo<sup>24</sup> / 脸蛋呈现窩形 597  
 河南漯河：喝酒窩儿 / he<sup>24</sup> jiou<sup>55</sup> uo<sup>24</sup> / 酒窩 1031<sup>11</sup>

<sup>11</sup> 漢字表記と音声表記が一致しない。漢字表記から“儿”を除去するか、音声形式の方でuo<sup>24</sup>をuor<sup>24</sup>に改めるかしなければいけないが、この問題は当面の議論には関わらない。

恐らくは“酒窩”の [tsiou] は「(飲む) 酒」の“酒”だというように、理解を容易にすべく、西華、漯河方言では“喝”を付けたものだろう<sup>12</sup>。安徽太平の例も“啄木工匠”という語形の報告例は見つけていないが、初頭音節が陽韻尾となった後に“木”が脱落し、[tsan kuəŋ] のようになった後に、[kuəŋ] は“工匠”の“工”であると認識させるべく、“匠”が賦与されたのであろう。所拠文献には“木”の音声形式が挙がっていないので、今それを仮に m-で示すと(成節母音 m̩である可能性もあり)、tsa m- koŋ → tsam m- koŋ → tsā koŋ となった後に“公”を“工匠”にしたということである。安徽省では他に“～公”という構成の「キツツキ」語形の報告例を見かけないから、なお説得力に乏しいが、とりあえずの試案として挙げておく。

### §9. “啄”の陽韻尾化

これまでに断片的に紹介しているが、以下に“啄”相当音節が陽韻尾になっている例を纏めて挙げる。

山东郯城：断磨虫 tuæ<sup>41-43</sup> mə<sup>41</sup> tɕ<sup>h</sup>uŋ<sup>55</sup>      啄木鸟 86、临沂 209

山东临沂：断磨虫 tuā<sup>312-31</sup> mə<sup>0</sup> tɕ<sup>h</sup>uŋ<sup>53</sup>      啄木鸟 山东方言词典 90

甘肃天水：啄木虫 ɛtuən ɛmu ɛts<sup>h</sup>uən      啄木鸟 普通 3713

甘肃天水：钻木虫 tsuan<sup>55</sup> mu<sup>0</sup> tɕ<sup>h</sup>vən<sup>21</sup>      啄木鸟 174

← tsuam mu ← “啄木” tsua mu

河北鸡泽：端木丘的      啄木鸟 721 ← “啄木虫的”？“啄木雀的”？

河北鸡泽：端木鸠儿      啄木鸟 (=河北肥乡) 河北词汇 118

Cf. 河北魏县：端树精      啄木鸟 河北词汇 118 ← “啄木虫”？

湖北安陆：锻磨佬 tan<sup>35</sup> mo<sup>55</sup> nau<sup>52</sup>      啄木鸟 FY94-4/311

← “啄木佬” ← “啄木鸟”？

上掲例のうち、最初の3例(山東郯城、临沂、甘肃天水)は概ね以下のような同化が起こって“啄”に-n 韻尾が生じたのであろう。

“啄木鸟” tɕauk muk ɕiŋ → tuau? mu? tɕ<sup>h</sup>uŋ → tua mu tɕ<sup>h</sup>uŋ → tuam mu tɕ<sup>h</sup>uŋ

→ tuan mu tɕ<sup>h</sup>uŋ → tuan mə tɕ<sup>h</sup>uŋ; 或… → tuə mu tɕ<sup>h</sup>uŋ →

→ tuəm mu tɕ<sup>h</sup>uŋ → tuan mu tɕ<sup>h</sup>uŋ → tuan mə tɕ<sup>h</sup>uŋ。

<sup>12</sup> これは太田 2006 で取り上げた。濮阳方言の“窩儿”[yʊor<sup>33</sup>]には声調表記に誤りがあったので、今、訂正して挙げる。

甘肅天水のもう一つの例の場合は、声母が *t-* ではなく *ts-* となっている点以外、恐らく成立のプロセスは変わらない。続く河北鶏沢の2例は語源が“啄木虫的”か、“啄木雀的”か、それともそれ以外の何かなのかよく分らない。河北では全濁平声が無気音になるような変化は見られないが、この語形に限って“虫”が特殊な変化をしたのかも知れず、また“雀”も本来は中古精母字で、多くの地域で有気音となっているのは、“鹊：カササギ”との混同若しくはタブー回避によるものと思われ、「キツツキ」のような語形で本来の無気音の形式を保ったと考えることも可能である。魏県の例を含め、一元的に解釈するなら、“虫”を採るべきだろう。

以下は後続音節が“木”でないのに *-n* 韻尾が生じている例である。

河北广宗：钻钻木子 啄木鸟 626

河北广宗：钻得木 啄木鸟 河北词汇 118 ← “啄木(鸟)” + “打”？

山东济宁：钻头木子 *tsuan*<sup>312-21</sup> *t<sup>h</sup>ou*<sup>42</sup> *mu*<sup>213-21</sup> *tsɿ*<sup>0</sup> 啄木鸟 山东方言词典 90

河北巨鹿：锻凿木 啄木鸟 697 ← “啄木(鸟)” + “凿”？

河北鸡泽：端截木儿 啄木鸟 721 ← “啄木(鸟)” + “截”？

河北广平：端树虫 啄木鸟 (=河北肥乡) 河北词汇 118

河北魏县：端树精 啄木鸟 河北词汇 118

内蒙黑河：禽堂木 *ɛtɕ<sup>h</sup>in* *ɛt<sup>h</sup>aŋ* *mu*<sup>ɿ</sup> 啄木鸟 普通 3713

河南杞县：叭叭端子 *p<sup>h</sup>a*<sup>24</sup> *p<sup>h</sup>a*<sup>0</sup> *tuan*<sup>24</sup> *tsɿ*<sup>55</sup> 啄木鸟 854  
← “锵锵啄木子”？

河南长垣：梆端端 啄木鸟 572

树梆梆 (又) 啄木鸟 572

cf. 河南邓州：捣么官儿 啄木鸟 90

河北衡水：墩打木子 啄木鸟 851 ← “啄木(子)” + “鸽打木(子)”？

河北衡水：顿打木子 啄木鸟 河北词汇 118

“啄”が本来の形式とかけ離れたものになることで、当て字がなされ、意味が曖昧になったので“啄”と“木”の間に“打”、“凿”、“截”などの類義語を嵌め込んで複合動詞化したということであろうか？

末尾の内蒙古黒河の例は

tɕ<sup>h</sup>ian tau mu → tɕ<sup>h</sup>ian taŋ mu → tɕ<sup>h</sup>ian t<sup>h</sup>aŋ mu → tɕ<sup>h</sup>iən t<sup>h</sup>aŋ mu ; 或いは  
tɕ<sup>h</sup>ian tau mu → tɕ<sup>h</sup>ian t<sup>h</sup>au mu → tɕ<sup>h</sup>ian t<sup>h</sup>aŋ mu → tɕ<sup>h</sup>iən t<sup>h</sup>aŋ mu

のような変化を遂げたものであろう。tau mu → tam mu ではなく tau mu → taŋ mu としているのは、u の奥舌の盛り上がりが残っていることを想定していることである。同時に双声化が起こったと想定しているが、それが単に syntagmatic な変化なのか、それとも民間語源その他の、何らかの paradigmatic な要因が絡んでいるのか、不明である。

河南杞県及び長垣の“端”は、“啄木”の合音となった姿かも知れない。以下のような変遷過程を想定し得る。

#### 河南杞县

“铎铎啄木子”                      “\*叭叭啄木子”                      “\*叭叭墩木子”  
pən pən tuə mu tsɿ → …… → pa pa tuəm mu tsɿ → pa pa tuəm m̩ tsɿ →  
“\*叭叭墩子”                      “叭叭端子”  
→ pa pa tuəm tsɿ → p<sup>h</sup>a p<sup>h</sup>a tuan tsɿ

#### 河南长垣

“梆啄木”                      “\*梆墩木”                      “\*梆端木”                      “\*梆端”  
paŋ tuə mu → paŋ tuəm mu → paŋ tuam mu → paŋ tuam m̩ → paŋ tuam →  
“梆端端”  
→ paŋ tuan → paŋ tuan tuan

ただ河南杞県で“叭叭”が何故 p<sup>h</sup>a p<sup>h</sup>a と有気音声母になっているのか理由が分からない。“鵲铎铎”の漢字表記で代表される語形では第二、三音節声母が p<sup>h</sup>- p<sup>h</sup>-と有気音になっている例は全く見られない。類音の擬音語に置き換えたということかも知れない。長垣方言の例は併用語形に“树梆梆”があるので、類推によって“\*梆端”も“梆端端”と同様の語構成になったということだろう。

#### §10.1 “啄”の声母 t- → l- タイプその 1

語源が“鵲打木”、“鵲叨木”( < ‘鵲啄木’ )のタイプには“啄”の声母が弱化して l- になるものがある。太田 2001 で既に指摘した。

河北唐山：赚得儿木 ɛtɕ<sup>h</sup>ian ɛtər mu<sup>7</sup>                      啄木鸟                      普通 3713

河北昌黎：鵲得木 tɕ<sup>h</sup>ian<sup>32</sup> tə<sup>0</sup> mu<sup>55</sup>                      啄木鸟                      方言志 186



- 河北滦南：鵠得木子 tɕ<sup>h</sup>ian<sup>32</sup> tə<sup>0</sup> mu<sup>55</sup> 啄木鸟 819  
 河北丰南：鵠达木子 tɕ<sup>h</sup>iæn<sup>22</sup> tə<sup>0</sup> lə<sup>0</sup> mu<sup>35</sup> tsɿ<sup>0</sup> 啄木鸟 635<sup>13</sup>  
 山东平原：鵠打木子 / qian<sup>21</sup> da<sup>21</sup> mu<sup>55</sup> zi<sup>0</sup> / 725-726  
 山东武城：千打木子 啄木鸟 467
- 
- 山东章丘：餐杂木子 啄木鸟 605  
 河南夏邑：参[ts<sup>h</sup>an<sup>214</sup>]子木 啄木鸟 527  
 山东济南：餐大木子 ts<sup>h</sup>ã<sup>213-21</sup> ta<sup>0</sup> mu<sup>21</sup> tsɿ<sup>0</sup> 一种益鸟，… || 木，此处从轻  
 声前不变调 词典 220  
 山东泗水：餐达木子 ts<sup>h</sup>ã<sup>213-211</sup> ta<sup>0</sup> mu<sup>312</sup> tsɿ<sup>0</sup> 啄木鸟 657  
 山东邹平：鵠打木子 ts<sup>h</sup>ã<sup>213</sup> ta<sup>0</sup> mu<sup>0</sup> tə<sup>0</sup> 啄木鸟 864  
 山东淄博：鵠(骚)打木(梆)子 ts<sup>h</sup>ã<sup>213-31</sup> (sɔ<sup>213-31</sup>) ta<sup>0</sup> mu<sup>0</sup> (paŋ<sup>0</sup>) tsɿ<sup>0</sup> 啄木鸟  
 2260  
 山东淄博：鵠打木 ts<sup>h</sup>ã<sup>213-31</sup> ta<sup>0</sup> mu<sup>0</sup> 啄木鸟 2260  
 山东汶上：参打木 ts<sup>h</sup>ã<sup>213-21</sup> ta<sup>0</sup> mu<sup>213</sup> 啄木鸟 153  
 山东邹城：鵠达木子 ts<sup>h</sup>ã<sup>213-111</sup> ta<sup>0</sup> mu<sup>213-211</sup> tsɿ<sup>0</sup> 啄木鸟 762  
 山东莒县：鵠达木子 ts<sup>h</sup>an<sup>13-31</sup> ta<sup>0</sup> mu<sup>31-55</sup> tsɿ<sup>0</sup> 啄木鸟 志 95  
 山东平邑：鵠达木子 ts<sup>h</sup>an<sup>213-21</sup> ta<sup>0</sup> mu<sup>213-21</sup> tsɿ<sup>0</sup> 啄木鸟（平邑、仲村一带  
 的叫法） 79  
 山东沂水：餐达木子 tθ<sup>h</sup>ã<sup>213-21</sup> tə<sup>0</sup> mu<sup>21-44</sup> ðɿ<sup>0</sup> 啄木鸟 125、临沂 209<sup>14</sup>
- 
- 河北抚宁：鵠拉木 啄木鸟 河北词汇 118  
 山东曲阜：餐拉木子 ts<sup>h</sup>ã<sup>213-211</sup> la<sup>0</sup> mu<sup>213-211</sup> tsɿ<sup>0</sup> 啄木鸟 63  
 山东嘉祥：餐烂木 啄木鸟 726

概略、以下のような変化を遂げたものと思われる。本文中に祖形として挙げる推定形式は、問題とする現代方言の諸語形を説明するのに必要な情報を備えた、中古音よりはかなり下と思われる段階のものである。名詞接尾辞の“子”や兒化の要素を省いている。

- ① …→tɕ<sup>h</sup>ian tau mu→tɕ<sup>h</sup>ian ta mu→tɕ<sup>h</sup>ian tə mu  
 河北唐山 山东平原 河北昌黎

<sup>13</sup> 漢字表記と音声表記が対応しない。漢字表記の方が“达”の後に lə<sup>0</sup> に対応する漢字一字がかけているか、音声表記の方で lə<sup>0</sup> が衍字かのいずれなのか判然としない。

<sup>14</sup> 後に挙げた文献では、“达”を“餐”に誤る。

② …→tɕ<sup>h</sup>ian tau mu→ts<sup>h</sup>ian ta mu→ts<sup>h</sup>an ta mu→ts<sup>h</sup>an la mu

河北唐山

山东济南

山东曲阜

③ …→tɕ<sup>h</sup>ian tau mu→ts<sup>h</sup>ian ta mu→ts<sup>h</sup>an ta mu→ts<sup>h</sup>an tə mu

河北唐山

山东济南

山东沂水

④ …→tɕ<sup>h</sup>ian tau mu→ts<sup>h</sup>ian ta mu→ts<sup>h</sup>an ta mu→ts<sup>h</sup>an la mu

河北唐山

山东曲阜

→ts<sup>h</sup>an lam mu→ts<sup>h</sup>an lan mu

山东嘉祥

“鵠”が[tɕ<sup>h</sup>ian]となる例が見当たらないので、[ts<sup>h</sup>ian ta mu]という段階の想定は問題がありそうである。“餐”という漢字表記が見られるから、“鵠”といばむ”[tɕ<sup>h</sup>ian]から“餐食べる”[ts<sup>h</sup>an]への連想が働いて、[ts<sup>h</sup>ian]を経ることなく、[tɕ<sup>h</sup>ian]→[ts<sup>h</sup>an]と変化したということであろうか。先に示した[tɕ<sup>h</sup>ian tsau mu]~[tɕ<sup>h</sup>ian tsa mu]のような形式であれば、不完全な双声化を起して[ts<sup>h</sup>an tsau mu]~[ts<sup>h</sup>an tsa mu]のように変えることを想定できるが、キツキ語形中の“啄”相当音節が t- で現われている形式にはそのような変化要因が内在するとは言えない。[tɕ<sup>h</sup>ian tau mu]~[ts<sup>h</sup>an tau mu]のような形式が殆ど見られないことにも注目すべきである。[tɕ<sup>h</sup>ian tau mu]はかつては広く分布していた、或いは[tɕ<sup>h</sup>ian ta mu]と[ts<sup>h</sup>an tsau mu]~[ts<sup>h</sup>an tsa mu]の衝突で[ts<sup>h</sup>an ta mu]というような語形が生まれたというような可能性もあるが、いずれも報告例が少ないので確たることは言えない。

“打”、“得”などで表記される後続音節は先に示したように、破擦音で現われる場合もある。これらは“啄”が本字であると考えerことで統一的に解釈できる。[tə]で現われる例があることから、韻母が弱化する傾向が見てとれるが、韻母に限らず音節全体が弱化していると考えerべきで、t→l は声母の弱化の現れに他ならない。河北撫寧方言の“鵠拉木”は初頭音節声母が tɕ<sup>h</sup>- であるのか、ts<sup>h</sup>- であるのか不明。“鵠”で表記しながら、音声記号は ts<sup>h</sup>- となっている例があるので、即断は慎まねばなるまい（河北邢台方言も同様）。また第二音節韻母も漢字表記は“拉”であるが、実際の音声は[la]ではなく、[lə]となっている可能性を排除できない。上掲例のうちにはこのような不確定要素が含まれるが、それが当面の議論に影響を及ぼす訳ではない。

“鵠”は溪母由来の团音字である。それが拗介音を保ってかつ尖音で現われるのは以下の2例のみ。同一地点であるので、実質1例ということになる。

河南濮阳：枪木喳儿  $ts^{hian}{}^{33} mu^0 t\text{ʂ}ar^{33}$  啄木鸟 省志 195

河南濮阳：抢木渣  $ts^{hian}{}^{55} mu^0 t\text{ʂ}A^{33-34}$  啄木鸟 500

この語形の祖形は“鵲啄木”がメタテーゼを起して“鵲木啄”となっていたものであろうか。“鵲啄木”に溯り得る形式について、その“鵲”が広範囲に亘って尖音となっていたとは考え難い。木をつつく様或いはその音から、「ヤリ」もしくは「鉄砲」を連想した結果ということであろうか。“鵲”が $[ts^{hian}]$ のような形式で現れる例は希少である。恐らく先の直音の $ts^h$ -のケースとは別個に扱うべきものであろう。

## §10.2 “啄”の声母 $t$ - → $l$ - タイプその2

“啄”相当音節の韻母が $[lau]$ ,  $[lan]$ のようにになっている例もある。先ずは該当例を挙げよう。

河北唐山：鵲刀木 啄木鸟 (=河北迁安、威县) 河北词汇 118

北京平谷：鵲叨儿木  $t\text{ʂ}^{hian}{}^{35} taur^{35} mu^{51}$  啄木鸟 180

河南内黄：枪叨木 /  $qi\bar{a}ng\ d\bar{a}o\ m\dot{u}$  / 啄木鸟 FPJ6/107

河北邢台：鵲老木 啄木鸟 河北词汇 118

河南鹿邑：千老木子 啄木鸟 753

河南郸城：枪老木子 /  $qiang^{24} lao^0 mu^{24-22} zi^0$  / 啄木鸟 565

cf. 陕西韩城：鵲包包 /  $\text{ɛ}qiang\ \text{ɛ}bao\ bao$  / 啄木鸟 931

山东曹县：苍郎木子 /  $qi\bar{a}ng\ l\bar{a}ng\ m\dot{u}\ dei$  / 啄木鸟 (西北) 593

以下、推定変化過程を示す。先の例同様の提示の仕方である。

①… $t\text{ʂ}^{hian} ta mu (ts\eta) \rightarrow t\text{ʂ}^{hian} tau mu \rightarrow t\text{ʂ}^{hian} lau mu$

山东平原 北京平谷 河南鹿邑

②… $t\text{ʂ}^{hian} ta mu (ts\eta) \rightarrow t\text{ʂ}^{hian} tau mu \rightarrow t\text{ʂ}^{hian\eta} tau mu \rightarrow t\text{ʂ}^{hian\eta} lau mu$

山东平原 北京平谷 河南内黄 河南郸城

$\rightarrow t\text{ʂ}^{hian\eta} lan mu$

山东曹县

③… $t\text{ʂ}^{hian} ta mu (ts\eta) \rightarrow t\text{ʂ}^{hian} tau mu \rightarrow t\text{ʂ}^{hian\eta} tau mu \rightarrow t\text{ʂ}^{hian\eta} tan mu$

山东平原 北京平谷 河南内黄

→tɕ<sup>h</sup>ian laŋ mu

山东曹县

漢字表記では “ 鵲啄木 ” となる祖形を想定しているので、最初の段階を tɕ<sup>h</sup>ian tau mu (tsɿ) → tɕ<sup>h</sup>ian ta mu (tsɿ) としている。tɕ<sup>h</sup>ian taŋ mu (tsɿ) という語形の報告例がないので、山東曹県の例は③ではなく、②のごとく、tɕ<sup>h</sup>ian lau mu (tsɿ) を経由して成立したものと看做すべきであろう。つまり山東曹県の成立過程について言えば、③より②の方が蓋然性が高い。なお第二音節が破擦音で現われる例では tɕ<sup>h</sup>ian/ts<sup>h</sup>an tsau mu (tsɿ) はあるが、tɕ<sup>h</sup>ian/ts<sup>h</sup>an tsan mu (tsɿ)、tɕ<sup>h</sup>ian/ts<sup>h</sup>an tsəŋ mu (tsɿ) のような陽韻尾韻化する例は見られない。

### §11. “ (鵲)啄木 ” — “ 头目 ” ? “ 鵲啄(木) ” — “ 前头 ” ?

“ 啄木 ” 相当部分が “ 头目 ” と見做されたかのような例も見られる。以下の例を参照されたい。

#### “ 鵲啄木 ”

辽宁锦州：鵲透木 ɛtɕ<sup>h</sup>ian ɛt<sup>h</sup>ou mu<sup>˥</sup> [m<sup>˥</sup>] 啄木鸟 普通 3713

河北滦县：鵲头木 啄木鸟 河北词汇 118

内蒙黑河：禽堂木 ɛtɕ<sup>h</sup>in ɛt<sup>h</sup>əŋ mu<sup>˥</sup> 啄木鸟 普通 3713

山东苍山：餐头木子 ts<sup>h</sup>ã<sup>214</sup> t<sup>h</sup>ou<sup>53</sup> mu<sup>214-31</sup> tsɿ<sup>0</sup> 啄木鸟 临沂 209

山东莒南：□头木子 tθ<sup>h</sup>ã<sup>42-55</sup> t<sup>h</sup>ou<sup>0</sup> mu<sup>21-31</sup> tθɿ<sup>0</sup> 啄木鸟 21

山东莒南：残头木子 tθ<sup>h</sup>ã<sup>42-55</sup> t<sup>h</sup>ou<sup>0</sup> mu<sup>21-31</sup> tθɿ<sup>0</sup> 啄木鸟 县志 787、临沂 209

山东济宁：钻头木子 tsuan<sup>312-21</sup> t<sup>h</sup>ou<sup>42</sup> mu<sup>213-21</sup> tsɿ<sup>0</sup> 啄木鸟 山东方言词典 90

第二音節 “ 啄 ” 相当音節声母の有気音化は双声化の結果であろう。

① … tɕ<sup>h</sup>ian tau mu → tɕ<sup>h</sup>ian t<sup>h</sup>au mu → tɕ<sup>h</sup>ian t<sup>h</sup>əu mu

北京平谷

辽宁锦州

② … tɕ<sup>h</sup>ian tau mu → tɕ<sup>h</sup>ian t<sup>h</sup>au mu → tɕ<sup>h</sup>ian t<sup>h</sup>əŋ mu → tɕ<sup>h</sup>iən t<sup>h</sup>əŋ mu

北京平谷

内蒙黑河

③ … tɕ<sup>h</sup>ian tau mu → ts<sup>h</sup>an tau mu → ts<sup>h</sup>an t<sup>h</sup>au mu → ts<sup>h</sup>an t<sup>h</sup>əu mu

北京平谷

辽宁锦州

それが先ずあって、如上の変化を遂げたものであろう。“啄”相当音節が軽声で発音される例については、軽声化によって主母音が  $a \rightarrow \text{ə}$  となって、“前頭”と結びつけられたということがあるかも知れない。そうであれば主母音の弱化の後に、第一第二音節が“前頭”と結びつけられて、見かけ上の双声化が起こったということになり、以下の変化過程が想定される。

④  $\cdots t\text{ɕ}^{\text{hian}} \text{tau mu} \rightarrow t\text{ɕ}^{\text{hian}} \text{təu mu} \rightarrow t\text{ɕ}^{\text{hian}} \text{t}^{\text{həu}} \text{mu}$

北京平谷

辽宁锦州

但し  $it\text{ɕ}^{\text{hian}} \text{t}^{\text{həu}} \text{mu}$  は 1 例あるが、 $[t\text{ɕ}^{\text{hian}} \text{t}^{\text{h}a} \text{mu}]$ 、 $[t\text{ɕ}^{\text{hian}} \text{t}^{\text{h}au} \text{mu}]$ 、 $[t\text{ɕ}^{\text{hian}} \text{təu mu}]$  に該当する形式の報告例が見当たらず、また  $[t\text{s}^{\text{h}an} \text{t}^{\text{h}au} \text{mu}]$ 、 $[t\text{s}^{\text{h}an} \text{təu mu}]$  に該当する形式の報告例も無い。或いは如上の連続的な推移ではなく、何らかの *paradigmatic* な要因による飛躍的な変化によって成立したのかも知れないが、説得力のある説明は思いつかない。

### §12.1. “虫” — “锤”

以下の初めの 3 例は“鑄樹虫(儿 / 子)”が変ったものであろう。木をつつく動作から「かなづち(で叩く)」を連想したということではないか？

河北宣化：鑄樹垂  $p\text{ə}\eta^{42} \text{su}^{213} \text{ts}^{\text{h}}\text{uei}^{42}$  啄木鸟 880 ← “鑄樹虫”

河北阳原：鑄樹锤儿 啄木鸟 670 ← “鑄樹虫儿”

河北阳原：鑄樹锤子  $\text{ɕp}\tilde{\text{ə}} \text{ɕu}^{\text{˧}} \text{ts}^{\text{h}}\text{uei} \text{tɕ}\eta$  啄木鸟 普通 3713  
← “鑄樹虫子”

河北康保：鑄樹虫 啄木鸟 980 (=河北怀安 638, 万全 959, 涿鹿 595)

山西娄烦：嘯樹虫  $p\text{ə}\eta^{33} \text{fu}^{54} \text{p}^{\text{h}}\text{ə}\eta^{33}$  啄木鸟 研究 77, 县志 662

山西静乐：嘯樹虫  $p\text{ə}\eta^{32} \text{fu}^{53} \text{p}^{\text{h}}\text{ə}\eta^{32}$  啄木鸟 648

山西静乐：嘯樹虫  $p\text{ə}\eta^{24} \text{fu}^{53} \text{p}^{\text{h}}\text{ɿ}^{33}$  啄木鸟 研究 214

河北张家口：鑄樹虫子  $p\text{ə}\eta^{42} \text{su}^{213} \text{ts}^{\text{h}}\text{u}\eta^{42} \text{ts}\eta^0$  啄木鸟儿 1915

山西盂县：鑄樹虫子  $p\tilde{\text{ə}}^{412} \text{su}^{44} \text{ts}^{\text{h}}\text{u}\tilde{\text{ə}}^{22} \text{ts}\text{ɿ}\eta^0$  啄木鸟儿 34, 县志 631<sup>15</sup>

山西阳曲：鑄樹銃子  $p\tilde{\text{ə}}^{213} \text{su}^{353-55} \text{ts}^{\text{h}}\text{u}\tilde{\text{ə}}^{22} \text{ts}\text{ə}\eta^2$  啄木鸟儿 74

山西山阴：鑄樹虫儿  $p\tilde{\text{ə}}^{313-31} \text{ɕu}^{335} \text{ts}^{\text{h}}\text{u}\Delta\text{r}^{313}$  啄木鸟 32, 县志 485

山西朔县：鑄樹虫儿  $p\tilde{\text{ə}}^{213-21} \text{ɕu}^{53} \text{ts}^{\text{h}}\text{u}\text{ər}^{35}$  啄木鸟 36

<sup>15</sup> 県志は  $\text{ts}\text{ɿ}\eta^0$  を  $\text{ts}\text{ɿ}\eta^{22}$  とする。

山西怀仁：鑄樹虫儿 pəŋ<sup>31</sup> su<sup>24</sup> ts<sup>h</sup>uər<sup>313</sup> 啄木鸟儿 35, 县志 478

山西原平：鑄樹虫儿 pəŋ<sup>213-31</sup> su<sup>53</sup> tsuər<sup>33</sup> 啄木鸟 74<sup>16</sup>;

Cf. “虫” ts<sup>h</sup>uər<sup>33</sup> 53

山西太原北郊区：鑄樹虫虫 pəŋ<sup>33-53</sup> su<sup>35</sup> ts<sup>h</sup>uəlŋ<sup>33-53</sup> ts<sup>h</sup>uəlŋ<sup>33-35</sup> 研究 202

## §12.2. “鑄樹虫” + “钎子” (“钳子”)

“鑄樹虫”の“虫”が“钎子タガネ”と関連付けられたと思しきキツツキ語形がある。以下の例を参照されたい。

山西忻州：鑄樹鷓子 pəŋ<sup>313-42</sup> su<sup>53</sup> tɕ<sup>h</sup>iä<sup>313-31</sup> tə<sup>0</sup> 啄木鸟 87

→ “鷓樹鑄儿”？“钎子”

山西定襄：鑄樹口子 pəŋ<sup>213-42</sup> su<sup>53</sup> tɕ<sup>h</sup>iä<sup>31</sup> tə<sup>ʔ2</sup> 啄木鸟 40

山西文水：梆梆雀 pu<sup>22-11</sup> pu<sup>22-35</sup> tɕ<sup>h</sup>iü<sup>423</sup> e<sup>22</sup> 啄木鸟 II/71-72

“鑄樹雀”という形式の報告例がないから、一先ずは“鑄樹雀”ではなく、“鑄樹虫”が元になっているものとする。西北方言では鳥名で“～虫”となるものに、他に「スズメ」（“飞虫”）、「カッコウ」、「キジバト」などがある。

## 麻雀

山东汶上：小虫 ɕio<sup>55-35</sup> ts<sup>h</sup>uŋ<sup>0</sup> 麻雀 153

河南新乡：小虫 ɕiau<sup>55</sup> ts<sup>h</sup>uŋ<sup>0</sup> 麻雀 省志 194

山东梁山：小虫儿 ɕio<sup>55-213</sup> ts<sup>h</sup>ũr<sup>0</sup> 麻雀 507

河南洛阳：小虫儿 sio<sup>53</sup> ts<sup>h</sup>uŋ<sup>31</sup> 麻雀 研究 143

山西长治：小虫儿 ɕio<sup>534-53</sup> ts<sup>h</sup>uər<sup>24</sup> 麻雀 79

山东邹城：小小虫 ɕio<sup>55</sup> ɕio<sup>55-212</sup> ts<sup>h</sup>uŋ<sup>0</sup> 麻雀 762

河南商丘：小小虫 siau<sup>55</sup> siau<sup>55</sup> ts<sup>h</sup>uŋ<sup>42</sup> 麻雀 简释 410

河北南和：雀虫儿 tɕ<sup>h</sup>iau<sup>55</sup> ts<sup>h</sup>uər<sup>212-21</sup> 麻雀 548

山西运城：飞虫 ɕi<sup>31</sup> p<sup>h</sup>əŋ<sup>0</sup> 麻雀 38、县志 669

山西平陆：飞虫 ɕi<sup>41</sup> p<sup>h</sup>əŋ<sup>0</sup> 麻雀 县志 578

山西临猗：飞虫儿 ɕi<sup>31</sup> p<sup>h</sup>əŋr<sup>24</sup> 麻雀 638

山西垣曲：喜虫 ɕi<sup>31</sup> ts<sup>h</sup>uər<sup>23</sup> 麻雀 624

河南陕县：西虫 ɕi<sup>53</sup> ts<sup>h</sup>uŋ<sup>21</sup> 麻雀 619

<sup>16</sup> tsuər<sup>33</sup> は ts<sup>h</sup>uər<sup>33</sup> の誤りであろう。

山西乡宁：西虫子  $\text{ɕi}^{53} \text{tʂ}^{\text{h}}\text{uəŋ}^{214} \text{tsɿ}^{20}$  麻雀 674<sup>17</sup>

### 布谷鸟

山西忻州：种谷虫儿  $\text{tsuəŋ}^{53} \text{kuə}^{?2} \text{ts}^{\text{h}}\text{uər}^{31}$  布谷鸟 词典 269

山西左权：姑姑虫  $\text{ku}^{31} \text{ku}^{31} \text{ts}^{\text{h}}\text{uəŋ}^{31}$  布谷鸟 左权卷 307

山西大宁：姑姑圪虫儿  $\text{ku}^{31} \text{ku}^{31} \text{kə}^{?31} \text{tʂ}^{\text{h}}\text{uər}^{24}$  布谷鸟 研究 164

### 斑鸠

山东鄄城：咕咕虫 /  $\text{gūgūchong}$  / 斑鸠 620

河南濮阳：咕咕虫  $\text{ku}^{33-34} \text{ku}^{34} \text{tʂ}^{\text{h}}\text{uŋ}^{452-42}$  斑鸠 500

### 鹊鸽

陕西陇县：揭被虫  $\text{tɕiɛ}^{53} \text{pi}^{31} \text{tʂ}^{\text{h}}\text{uŋ}^{31}$  鹊鸽 949

### 黑卷尾

陕西千阳：揭被虫  $\text{tɕiɛ}^{21} \text{pi}^{44} \text{ts}^{\text{h}}\text{uəŋ}^0$  黑卷尾 359<sup>18</sup>

### 杜鹃

陕西岐山：揭被虫  $\text{ɛtɕiɛ} \text{pi}^{?} \text{ɛts}^{\text{h}}\text{uəŋ}$  杜鹃 689

陕西千阳：算黄虫  $\text{suæ}^{44} \text{xuəŋ}^0 \text{ts}^{\text{h}}\text{uəŋ}^0$  杜鹃 359

「スズメ」の場合は穀物に害を成すということで、タブー意識が働いて“长虫：ヘビ”“大虫：トラ”同様に対象を矮小化して“～虫”という語構成となったと解釈する余地があるが、「キツツキ」にはそのような可能性はない。“飞虫：スズメ”の“飞”が一樣に  $\text{fəi}$  ではなく、 $\text{ɕi}$  となっている点については議論が必要だが、今は指摘のみにとどめておく。“啄木虫(儿)” (§1.、4.)、“啄树虫” (§2.)、“叨树虫” (§6.10) などの形式と同様に、“鑄树虫(子/儿)”もまた“～虫”で“～鳥”、“～雀”同様の構造を成していると見るべきであろう。上に示したように、「スズメ」、「キツツキ」以外にも報告例は希少だが、“～虫”という語構成の鳥名がある。そしてそのほとんどが西北方言の例である。

多くの北方方言では「(総称としての)小鳥」を“虫蚊(儿)”という。これは本来は昆虫と小さな鳥をひっくるめた言い方であったと思われるが、語釈が単に小鳥の総称、或いは鳥の総称としている文献が少なくない。こ

<sup>17</sup>  $\text{tsɿ}^{20}$  原文は  $\text{ts}^{?20}$  とする。同方言では入声が無いので、 $\text{tsə}^{?20}$  の誤りである可能性は無い。

<sup>18</sup> 語釈未詳。後に掲げる“杜鹃”の直後に見える。日本語では「オウチュウ」と言い、スズメ科に属する鳥らしい。以下のサイトを参照した。“黒巻尾”

<http://baike.baidu.com/view/71594.htm> (アクセス日時 2014.9.23.11:32) なお角川大辞典 p.1253 には「(魚)オーチュウ」とあるが、(魚)は(鳥)の誤りだろう。

の総称が最も代表的な「小鳥」である「スズメ」の名称に転用される例が見られる。それが更に類推によって一部の鳥の名前にも適用されたということではないか。そして“虫蚁(儿)”同様、“小虫(儿)”も、恐らくは(昆虫及び)小さな鳥の総称であったものが、小鳥の代表格の「スズメ」の名称に転用され、それが類推によって、他の鳥の名にも“～虫”という語構成のものが生まれたのであろう。以下の例を参照されたい。

### 小鸟 1

- 山东莒县：虫蚁  $ts^h u\eta^{53-13} i^0$  小鸟、昆虫的总称 志 94  
 河南确山：虫蚁 /  $cong^{42} yir^{312}$  / 小鸟儿 559  
 山东金乡：虫蚁儿  $ts^h u\eta^{42-55} ier^0$  泛称禽虫类 116  
 河南洛宁：虫蚁儿  $ts^h u\eta^{53} ir^{21}$  小鸟的统称 601  
 山西晋城地区：虫蚁儿  $ts^h uo\eta^{324} i\tilde{a}r^0$  鸟类，昆虫的泛称 218

### 麻雀 1

- 山东宁津：虫鹁儿  $ts^h u\eta r^{53-44} ir^0$  麻雀(旧时或称) 志 156

### 小鸟 2

- 山西陵川：小虫  $\zeta iao^{213-211} ts^h u\eta^{53}$  小鸟 46

### 麻雀 2

- 山东汶上：小虫  $\zeta io^{55-35} ts^h u\eta^0$  麻雀 153

### 小鸟 3

- 陕西澄城：飞虫  $\zeta i^{21} ts^h u\eta^{02}$  飞鸟 615

### 麻雀 3

- 陕西合阳：飞虫 /  $xi^{31} [pf^h]eng^{31}$  / 麻雀 803

“鑄樹釭子”という漢字表記の例は見ないが、山西忻州の“鑄樹鴿子”及び山西定襄の“鑄樹口子”は恐らく“鑄樹虫”の“虫”が“釭子：タガネ”と関連付けられたものだろう。前節で取り上げた“鑄樹垂”は河北省西北部に分布しており、山西中央部よりやや北に分布する“鑄樹鴿子”とは分布域が隣接していないし、どちらも報告例が希少なため、独自の変化である可能性が高く、両者を一つの変遷過程で説明すべきではないだろう。“鑄樹虫子”が同じキツツキ語形の“鴿”を含む語形、例えば漢字表記で示せば“鴿鑄鑄”( $t^h ian p- p-$ )と混交を起して成立した可能性についても検討すべきだが、データが足りない。



### §13.とりあえずの結語

小論では「キツツキ」の方言語形を対象に、その変化の諸相を取り上げ、議論した。既に触れたように、指示対象のズレはインフォーマント或いは記述者の誤解によるものも含まれているだろう。しかしこれに民間語源、類推などが絡み、本来の語形から大きく逸脱して変化する様の一端を紹介することはできたと思う。また syntagmatic な要因によって、本来の字音形式からずれて、語源が不明となった語形が民間語源によって再解釈され、更に変化が促進される状況についても紹介できたと思う。

今回もまたズボラで方言地図を提示することなく方言地理学的な議論を展開したので、データについて十分な知識の無い読者には或いは十分な説得力を示せなかったかも知れない。私の批判されて当然の“老問題”である。（本文はこれで完結。続く(4)で参考文献、方言資料一覧を挙げる）